

校外学習のしおり

—足尾山地の探索，植樹—



5年生の時のドングリ拾い

茨城県古河市立 古河第七小学校

6年 組 番

校外学習（足尾銅山，足尾山地）

1 期 日 平成16年6月22日（火）

2 場 所 足尾山地 栃木県上都賀郡足尾町

3 目 標

- (1) 鉱山の歴史や様々な仕組みを知ろう。
- (2) 渡良瀬川上流の足尾山地の様子を知ろう。
- (3) 森林の回復を願い，足尾山地に植林をしよう。

4 日 程

学校発	8：30
足尾植林	10：40～11：40
昼 食	11：50～12：30
現地探索	12：40～13：30
学校着	16：00

5 注 意

- (1) 資料館では，マナーを守り，静かに見学しよう。
- (2) 山地では，周囲の安全を確かめ，注意深く行動しよう。
- (3) 道路の歩行や横断の時，交通事故に気をつけよう。
- (4) 自分勝手な行動はつつしみ，周りの人に迷惑をかけないように行動しよう。

6 服 装

ジャージ下（暑くなったら脱げるように）紅白帽子 運動靴
名札

7 持ち物

リュックサック，弁当 水筒 ビニールシート カップ しおり
筆記用具 ハンカチ ティッシュ よい止めの薬など 軍手
ビニール袋，アメ

8 資 料

足尾銅山

足尾銅山は，1610年（慶長15年）に見出されて以来，江戸時代から昭和48年までの400年近く続いた歴史のある銅山です。足尾で採掘された銅は，昔，東照宮や江戸城などの建造に使われたり，オランダや中国などへも輸出されました。銅山はその後，一時すいたいしますが，明治10年に入り「古河市兵衛」の経営となってからは，生産技術が次々と近代化され，生産量が急速にのびて発展の一途をたどり，大正初期には，人口が県内で宇都宮について第2位となり「鉱山都市」と呼ばれ，やがては名実ともに日本一の銅山として大いに栄えました。その一方で渡良瀬川沿岸の地域に深刻な鉱毒問題を引き起こしていました。時は流れ，銅の生産も次第に減少し，昭和48年に閉山となりました。



足尾銅山鉱毒事件

足尾銅山から流出する鉱毒により，足尾の山々に源を発する渡良瀬川沿岸の地域の農業や漁業に被害が生じた事件です。銅山は1877年に古河市兵衛が経営するようになってから，日本の産業の発展に伴い急激に発展していました。ところが1878年頃より洪水の際，渡良瀬川に魚が死んで浮き上がるなどの異変がおこり，1880年には栃木県令が，渡良瀬川の魚は有毒であるで捕獲を禁止するという布告を出すに至りました。その後も銅山が水源地帯の山林を銅山用に乱伐したこと，及び森林にばい煙による大きな被害が生じたことにより，洪水がひんぱんに起こるようになって鉱毒被害はますます激しくなりました。こうした中，栃木県選出の衆議院議員「田中正造」は鉱毒問題を何とかしようと明治政府に対し何度も訴えかけました。それにより，内閣に足尾銅山鉱毒調査会が設置され，鉱毒除害の工事をしよう命令がなされましたが，根本的な解決には至りませんでした。1900年には，被害民数千人が請願のため上京途中，川俣村で警官隊と衝突するという川俣事件が起こっています。1901年に代議士を辞職した田中正造が，鉱毒事件について明治天皇に直訴するにいたって，それに賛同する声が世の中に広まり，政府も再度鉱毒調査会を設け厳重な鉱毒予防工事の実施命令を出すなど，やっと実質的な対策をとり始めました。次いで政府は，洪水の害を緩和するため渡良瀬川と利根川の合流点に近い栃木県下都賀郡谷中村を

土地収用法に基づき強制買収し、これを遊水地とし、同村は廃村となりました。

田中正造

田中正造は、天保12年(1841年)11月3日に栃木県佐野市小中町(旧旗川村)で、旗本六角家の名主である富蔵、サキ夫妻の長男として生まれました。名主になった正造は、不正をはたらく領主と対立するなどの苦難を乗り越え、明治10年代には自由民権運動家として、また栃木県議会の指導者となっていました。

明治23年の第1回総選挙で衆議院議員に当選し、そのころ農作物や魚に大きな被害を与えていた足尾銅山の鉱毒問題をくり返し国会でとりあげ、渡良瀬川沿いの人々を救うために努力しました。しかし、国の政策に改善がみられず、ついに明治34年(1901年)12月10日、天皇に直訴しました。その後、鉱毒事件は社会問題にまで広まりましたが解決せず、正造は悲痛な思いで谷中村に住み、治水の名のもとに滅亡に迫り込まれようとした谷中村を救おうと、農民とともに村の貯水池化に反対し再建に取り組みましたが、大正2年(1913年)9月4日に71歳10か月で世を去りました。

※ 当時、天皇への直訴に対する最高刑は「死刑」であり、正造は死を覚悟の上で命をかけて行動しました。

渡良瀬遊水地

栃木・群馬・茨城の4県にまたがり、3300haの面積をもつ無人の葦原です。ハート型の谷中湖があり、貴重な自然がたくさん残されています。明治政府は、鉱毒問題を治水問題にすり替え、正造たちの反対を押し切って谷中村民を追い出して遊水地としました。現在では、レジャー目的の開発に対し、環境破壊反対の大きな声があがっています。

古河七小のピオトープ

平成12年度に子どもたちの手でつくられた七小のピオトープ(トンボ池)には、渡良瀬遊水地の土が使われています。そのため、遊水地に存在する植物が自然に発生し、育っています。ミズアオイがその代表です。古河七小学校30周年記念航空写真は、絶滅危惧種であるミズアオイが七小のピオトープから芽が出たことを記念してデザインしたものです。



古河七小よし刈り・よしず編み



(写真左：渡良瀬よし刈り)

(写真右：七小でよしず編み)

足尾の山々は、鉱毒事件で草や木が枯れてしまったからは、地面がむき出しになり、土の流出が進んで地表10センチほどで岩盤になってしまっているため、なかなか植樹が進みません。そこで、下流にある渡良瀬遊水地のよしを刈り取ってよしずを編み、足尾の山々の地表に敷き詰め、土壌回復をめざしています。渡良瀬遊水地は足尾山地の下流なので、よしずで山の表面を守っても生態系上問題はありせん。よし刈りはNHK、よしず編みは産経新聞社の取材を受けていましたね。覚えていませんか？

こなら・みずならドングリ育て



みずならなどの木の実はドングリは生長するのに何年もかかりません。ドングリから植樹用の苗木になるまでになんと3年以上かかるのです。そのため、5年生の時に足尾で拾ってきたドングリが植えられるようになるのは、みんなが中学2年生になった頃です。だから、今回植樹にいく苗木は今の中学生が拾ってきて育てた苗木と、苗木里親が育ててくれた苗木です。先輩たちの意志を継いで、また、渡良瀬の上流地の自然を回復するというめあてをもって、がんばりましょう。